F成 25年 2月号 No.557

お年寄りたちの貴重な体験談を、邑楽町あすへひとこと編集委員会が編集・発行したものです 「あすへひとこと」(邑楽町老人クラブ連合会・あすへひとこと編集委員会)は、 邑楽町在住の

残してほしい貴重な話しをお届けします 若い人たちに語り継ぎたい。そして、 次の世代に

あす

お年寄りたちの貴重な体験談〈第二十一回〉

昔をたどって汗と土

初期は奥深い松林と雑木林に囲ま 市と接近している。大正、昭和の 私の地区は邑楽町の東端で館

辺鄙な一寒村であった。い地区で軒数も少なく電灯もない 方角を間違え、迷うほどの寂し キノコ取り。ワラビ取りに行くと 子どものころは落葉さらいや、

であった。 況が続いた。未曾有の緊縮不況時七年ごろは働くにも職はなく、不 た。しかし時代は厳しく、百姓の り、先祖伝来の家業を継ぐという 生活はなかなか苦しかった。昭和 昔ながらの伝統によって養育され て生まれ、土地に親しむというよ 私は大正初期に農家の長男とし

であった。

物価は、 米 (一俵) 六円~八円、

> 買うことができないほどの不景気 五銭~七銭、 豆腐(一丁)五銭、たばこ(一箱) であった。 一日の労働賃金は四〇銭~五〇銭 円。これらの品物も思うように 酒(一升)九〇銭~

三、四年継続事業で土地改良が行わ ばならなかったのである。その後 から松根油を採取したりした。 成を行った。資源愛護で、 駆者)が、山林を開墾し土地の造 五○銭くらいで汗を流して働かね 昭和十年ごろ地区の先覚者 父や母はこの開墾作業に一日 汗と土の結晶が実を結んだの 松の根 (先

やむをえず馬鈴薯(じゃがいも)ない、作物を作っても結実しない、 うように堆肥も入らず化学肥料も 苦心しなければならなかった。思 しかし、その土地の利用計 画に

> 壌の改良)に没頭した。 全然皆無、そこで農家は客土(土に数えれば一つか二つ、米などは などを植えた。しかし、 一本の苗

れたのである。 えず、農家の悪戦苦闘は繰り返さ なかった。もちろん機械などは使 鍬で掘り起こすよりほかに方法が な状態であった。しかたなく万能 馬の足も股まで入ってしまうよう いが続いた。しかし、耕作には牛 夜明けから日没まで、土との戦

りを行い、もみすりなどは十一時 つくような時、 米の収穫期には朝霜のある凍て 月夜の晩に刈り取



・おうら創造の森)

高齢者の語り第一集

仕事は責任を持って各自の職に精 と若い人に笑われるかも知れない。 が必要かと考えるので。 ある。その美しい心と不屈の精神 の農地に親しみ愛着を寄せ、精根 たかよく分かる。 かに重労働で忍耐力が必要であっ で作業をした。当時の農業は、い しかし、楽しく遊ぶときには遊び 込めて毎日自然と戦っているので ごろまで手回しのスルス(すり臼 この苦労の末、美田化した現在 今こんなことでペンを走らせる

く変わりないと思う。 進するということは、 私は結論として、昔のことわざ 今も昔も全

がとう」と申し上げたい。 母に心を込めて「ご苦労さまあり ギーを歓迎し、先輩の皆さんの父 成らぬは人のなさぬなりけり」の 言葉どおり、若い人たちのエネル なせば成るなさねば成らぬ何事も

故・小林 要市さん(鶉上・一二区) 月一日発行)」より あすへひとこと(昭和六一年二 「昔をたどって汗と土」

From editors ▼今年に入って、2ついいことがありました。1つ目は長男の誕生 夫として出産に立ち会ったのですが、特に何もできず、ただ妻のそば にいるだけでした。でも、産声を聴いた瞬間は、感動で少し涙が…。現 在、長男は家族の中心人物となり、みんなに甘やかされ放題の日々を 送っています。将来、わがままな子に育たないか少し不安 つ目は、広報おうらが上毛新聞に掲載されたこと。大見出しはV3。 県の広報コンクールで3年連続町村の部一席との内容でした。これ も町民の皆さんのご協力あってこそ、そして、家族をはじめ多くのか たがたの支えがあったからこそだと感じています。来年も、同じよう なことを「ひとりごと」に書けるように頑張りたいと思います(秋元)

雪帽子の 紅い山門



Photo 根岸定男(記録ボランティア)